

＋ [150] ブジintaケ

＋ [150] ブジintaケとナミカワゴンベイツブガイ

「こんなに人が溢れちゃ、誰かが我々みたいなことしないと地球が保たないよね。それにこの人達は喜んで、自ら進んで、肉体提供を受け入れてるんだから。」

我々サイドは全て合法ですので、ね。そちらは知りませんけどね。この観光バスは日帰りで、車体は今日中に返さないといけない。受け入れはしつかりやってあげてください。」

「何いつてんだ、ウチらだつて合法だよ。ねえ。」
そうそうと頷く。

大型バスの前を走る乗用車は、口の悪い献体派遣業者が運転する毎回同じ少々古びた国産高級車。行き先が近いと言うことで二人の客が相乗りとなっているが、お互いがお互いの保証人同士でもある。

今回で三回目とあって緊張もほぐれて、長い道中、少し立ち入った自己紹介をしまつたりする。そもそも保証人を強いられた以上は相手のことはよく知っておきたい。

「観光組合の方から公開命令がきちやつて、いままで小出しにしてたんだけど。」

「ああ、うちもそう。今までも大学には公開してるんだけど、フリーってのは困るよねえ。」

「無形文化財の指定までもう少しでき。それならつて同意したんさ。そしたら、これ。」後ろの観光バスをあぐで指した。

「量産がいいとは限らないねえ、一人で出来る限度があるもんね。とにかく他人には任せられないし、私達は言ってみれば歌舞伎俳優みたいなもんで、継承した責任というか、責任とれなげや継承できないという、絶対の掟があつて、代々守つてきた訳じゃない。」

古く長く継承を勝ち取った文化は、文明の変化に少しづつ打たれながら、残すことを、生かし続けることを前提に労力を投入され、時として長い各時代の特徴だけで構成したような特殊な奇形を成すことがある。その永續性の果てに得た各時代に対する奇形性によって、逆に強い信頼と地位を得ているのだ。日本の古典芸能のほとんどにそれが見られる。西洋のクラシック音楽にも同様のことが言えよう。バレエもしかし。必然ではあるが、常に古典と現代とは相互奇形の関係にあるのだ。例えば、隣に同席している海産物業者にも話したが、僕のキノコ栽培だ。

僕の自慢の裏山には。沢山のキノコが産じ、その種類の多さと希少な差を持つて世界一だろう。樹木の陰、生き物の陰、果てには幾重にも施されたトンネルの中。僕は自然に生えてくるキノコではなく、自ら生えるを促して代々その形質を華やかな芸術へと改良せし数百年の歴史を持つ山守の継承者だ。今でも季節を問わず膨大な数のキノコを管理している。

しかし、そのほとんどは安易な食用ではない。農業の一部ではなく、市場や外の店に出さない。例えば、僕は自給自足の生活ではあるが、主食となるものは目の前の平野に広がる穀倉地帯から得ていて、自分の滋養の為にはそれほどキノコを求めていない。

そんな僕がわざわざ山に登って藪をかき分けキノコ摘みをするのは、芸術を楽しむために来るお客様のため。芸術の対価として潤沢な資金援助もあり、キノコ喰の為の大きな楼閣が古くから建てられている。

我がキノコ達は、惚れ惚れする程のバリエーションを誇り、いかなるお客様にも対応できる。しかし、さわやかな山菜ではなく、どこことなく不気味な我がキノコを限定して山の幸としているあたりから、お客様の方向性は推して知るべし。あまりにも業の強い方はお断りしている。キノコが怖がってはいけない。

客の好みに合わせて、姿、声、香り菌ごたえ色、毒の有無。山に入る前におおよその種類は決めておいて、大きな籠を背負って出発する。

丹精込めて採取したキノコはそれぞれ特殊な手法で下ごしらえをされる。その間、前菜に我が刺激の効いた毒キノコを食べたお客様は体が変形し、箸を持つのもやつと。複雑なパーツに分解して人間とは判らない。我も同席して茸を食べるのだが、体は、何故か変形せず。それを利用して、次のおもてなしの段階に入る。我の肉体の人間らしさが、変形したお客様との対比によって人間の種の特徴が強調される。お客様達は、人間の体を保つ我を見て、懐かしそうに触れる。そこで服を脱いで全身を饗すれば宴全体が爆発的に盛り上がるのだった。そうしてからいよいよ本膳をお出しする。それはとても神聖なことでもあるので、新しいお客様が混じることがあれば、必ずその由来をご説明差し上げております。

戦国時代、その豊かな穀倉地帯を狙って争いが頻発。多くの人命が失われた。山は平野を守備する為の天然の要害として常に侵略の先鞭を受け、激しい戦いが展開されて肝脳塗地の有様。そしてその国の特徴的な戦法に「山津波」というものがあつた。人為的に土砂崩れを起こして敵を一網打尽にするのだ。樹々は焼き払われて赤土の山肌が露出。その上に簡易的なダムが作られる。水分を多く含ませた土砂を流し落とすと、樹々の抵抗のない部分で十分に加速され、凄まじいエネルギーを持つて麓に展開している敵に襲いかかる。その設備は麓から見えないようにカモフラージュされていて、まずはうまく山津波の射程内に敵が陣を敷くように誘い込む。敵を陥れるのは容易な事ではなく多大な犠牲を伴うこととなり、山津波打ち出しの頃には、その麓に敵味方入り乱れて無数の遺体が転がる。しかし、それら無念の遺骸はその地に埋葬されることが多く、山津波の大量の土砂によって覆われてしまうのだつた。その山肌には死体と土砂の層が幾重にも積まれ、人体の養分だけではな

く、武士の無念も豊富にしみ込んで。後の世には驚く程豊かな毒キノコの産地となった。戦被害のない時代であつても飢饉などの災厄に見舞われて、毒キノコを食する技術も発達し、その山で産する数十種類の毒キノコの全てに毒の作用と処理法が調べられて毒キノコ食が確立したのだつた。また、毒にも様々な種類があり、量を間違わなければ酒のような作用を引き出せるものもある。麓の村には数軒の居酒屋ならぬ居茸屋があつて、酒と茸を交互に楽しむのがこの土地の特徴でもあつた。しかし、いつの世でもそうだが、中には茸で身を滅ぼすものもいて、少しずつ禁令にかかる品種が増えた。また、調理ミスや手間がかかる事もあつて、江戸中期頃には表向きはほとんど絶え、その山を守る一族だけが、秘術として継承してきた。

茸の下を掘ると、すぐに骨が出る。それは採集技術上とても重要な要素だ。我は茸取りの前夜、黒い山腹を見据え、骨から浮かぶ燐光を探して当たりをつけるのだつた。武士達はヒトダマを灯して我を呼び、茸として山を下りて人々と交わる。

そして交わつた人々の内何人かは、そのまま武士の世界へ持つて行かれてしまふわけだが、それが本来の目的で、武士達の体だけでは何百年もキノコ山を維持できない。武士達と交感して魅入られてしまうと、自ら山に入つて穴を掘り、キノコ柱となる。そんな犠牲の上に数百年も守られてきた。

武人様と呼ばれるその大型の菌類はときには身の丈ほどに空中柱をのぼし五段から十段の円形の傘を開く。それが鎧甲を身につけた侍のような外観となることからその地域では武人様と呼ばれ、祭礼のときなどにその一部が饗される。タマゴ茸科天狗茸の亜種とされているが、諸説あり、その傘の大きさはキノコ類の中で最大級。神経系に作用する毒あり。

食用の習慣がある一部地域において栽培されていた時代もあり、栽培方法も研究されていたようだが、その方法は閉じられた伝承形式で公には不明。

と、気の利いた菌類研究文献に載つたこともあるが、その中心部分は理解されていないし、学者でさえ見ることが出来ていない。

芽精が一番下の大きな傘の何処かに隠れている。雨の日は傘の外に出て走り回っているのを見たこともあるが、普段は石づきから別の株が生えるかのごとく、斜めにくつついている。傘をめくるとキロリと見上げる様はとても可愛らしく、元は武士の怨念の変わり果てた姿だとはにわかには思えない。その姿は稚児の時もあれば、妖艶な女の時もある。無骨なる男の例はないようだが、ある日白い髭を長く伸ばした仙人風の老人が出たことがあつた。武人様の傘一枚に対し一人を産す。傘の枚数を増やすごとに大きな芽精を出し、芽精の年齢も老けて見える。しかし、多くは美しい若者で、人を惑わしあわよくば自らの苗床とせんが為のキノコの術策であると肯ける。

身の丈は、稚児は二尺、大人は四尺ほど。重さは人の三割ほどの軽さ、言葉は使わない。山から降ろしてもしばらくは動き回っていて、次の日の夕暮れには止まる。府分けてみれば骨や肉は人と似ているが、腹の中は粉がモツシリと詰まるばかりで臓器はない。しかし、頭部は極めて人に近く、植物の花を分解したかのような単純さの中にも、菌類としては驚異的に複雑な構造を有して、人のように振る舞うすべを心得る。

かごに入れて山から連れて帰ると、服を着せ髪をとかす。男でも男を好む者が多くいるように客の性別を問わず、男女稚児取り混せて饗す。が、皆華やかな衣装を着せてやる。豪華な打ち掛けの下に、時として、ゴム製のレオタードやビンヒールブーツなど、客の好みを察して現代風に演出を加え進化させている。アイドルやア

ニメのコスプレなども、やってみた。古書を紐解けば、ご先祖から先代もすべからく衣装の工夫に懲り、当世風のデザインを存分に楽しんでおられ、その精神が伝統と言える部分であろう。馴染みの客ともなれば、自分で誂えた衣装を一揃え持参し一人貸し切りで豪勢に宴を催す。

我が調整した毒キノコは徐々に色を変えて、客の心を開いてゆく。そこへ美しい芽精が現れ、傍らに座るのであった。一人に一つの芽精。それは明日の夕に消えて亡くなる儂い者。その愁いを含んだ姿に心を打たれ、酌の一つもされれば涙も出よう。武家の作法を心得ている者達なので、極めて礼儀正しく、粗相がない。乞われれば能を舞い、竹刀にて立合を見せる。深酒をしてしまう客があれば介抱す。そのけなげで凜とした姿は誰の心も虜にしてみよう。いつか手を取り、離れがたく、抱擁し、一夜を過ごす。芽精は客を愛し、客も芽精を愛し本心に離れたい気持ちで朝を迎え、昼までには必ず解毒の処方を施す。

芽精は毒を分泌し、愛を生む。その毒は肉体を楽にさせ心にゆとりを持たせ、芽精を受け入れて相思相愛としてしまう。昼を過ぎるまで放置すれば、芽精に引かれて山に入り、穴を掘って苗床となる。

我でも数年に一度はこれは危険だと思ふほどの好みの娘がとれ、翌日には消えてしまうと思えばこそ焦がれ、頬を寄せたりしてしまふ。すると気が付かぬうちに毒が回り、いつそ苗床にとふらふら裸の芽精の美しい尻を追いながら山を登り始め、危ういところで助手に助けられたりする。河豚の毒も危ないが、キノコの毒も相当危ないのだ。

解毒を怠り、芽精の管理を怠ると、つまり素人がそれに手を出すと云うことだが、間違いなく確実にどんなに遠方からでも山に戻り苗床とされてしまふ。

解毒は三度にわたって行すが、念には念をの三度であつて、解毒薬はそれぞれにおいても十分効果がある。まずは香を焚く。香の中に解毒作用のある楠科木の薬根が燻じられ、その作用を楼の隅々まで行き渡らせる。鼻

に少し香るほどで十分効果がある解毒法だ。さらに茶に混ぜるまた別の薬。最後に解毒剤でございまずと手渡す丸薬。解毒を聞いて従わない客は、先の二つの方法が効果を現していない証拠で、そうなればその客に付いている芽精と共に隔離して、もてなしを続け、時間を稼ぎ、芽精の事切れるを待つ。未効果が発覚した時点で、芽精を斬り殺すことも出来るが、情を交わしあっている仲を乱すことはこの楼閣においての一番の無粋となり、すぐに命に関わることもなければ穏便に勤めるのだ。

解毒されても多くの客は、芽精の命が夕までと知っているので、今生の別れを惜しんで泣く。

芽精の方も苗床とさせずにしくじったとは思わず、悲しげな面持ちで客を慰め、死ぬ前に華やかな宴をいただきありがたい等の口上が書かれた文扇を手渡すと、別れの間小さなくぐり戸に入ってしまう。その戸は芽精の通るにやつとの大ききで人はその先には入れず、儀式的流れの仲で分離されるのであった。

谷を降りる客達は何度も山を振り返る。

深い山の威容を芽精との生き物としての隔たりと重ね、諦める。

芽精は客と別れても、その後のことを達観し礼節を失わない。着ていた衣装を脱ぐときれいにたたみ、後片付けを手伝い、山に帰る。紐を手わたしておく、人の真似をして枝で首をくくくすることもある。首をくくくつても人のように即座に死にはしない。干物として数日かけて乾いてゆく。毒があるので獣は食わず、たいていはそのまま体は残り、山を手入れする折に乾ききった芽精のなれの果てを見つけては取り込んで楼閣の裏に建てられた脱髪堂へ安置する。芽精達の丸く円陣を組む曼茶羅は大晦日までその年の宴の数だけ増え続け、護摩と共に焚かれ灰になる。

灰は驚く程純白だ。

さて、苗床だが、以前は自然と人がかかり、また芽精も遠くへ歩いていつて人を導いてくるため新たな武人様

が年に二、三本は立っていた。しかし、その仕組みが判り人を殺めるキノコと判明したときには、既にそれを
樂しむ術は確立して、楼閣が建てられていた。苗床を得るのはいいが、人が殺められて行くのは見過ごせない
ことで、さりとて芽精は失いたくない。そして、ご先祖が長い研究の果てに確立した秘術によつてそれを克服
し、谷を封じたのであった。谷の外へも広がっていた武人様達は抜き取つて谷の中に移し、柵と石垣によつて
尾根を囲い楼閣の左右に池を配して堀とする。実は苗床となるのは人だけではない、大型の獣であつても可能
だ。ただしそれは非常に難しい。人の手によつて芽精を騙さねばならない。それこそ代々口伝にて伝わる秘術。
隣の海産物業者は私の置かれた立場を深く知っている。何故ならきつとこの男も越えてきた苦勞に違いない。
秘伝を受領するのは並の覚悟では出来ないが、その御陰で、代々その術が絶えず残されている。人類の有史始
まつて2170年、絶えてしまつた技の幾多あることか。
我が伝授されたときも些か危ういところであつた。

「いいね？よく見ていたか？はあ、はあ。」
息を切らしながら父が言つた。

「お父さんが明かした秘密は、おまえが死ぬまでに、一人だけ。おまえの息子か、信頼できる弟子一人に伝え
守るように。一子相伝の秘術だ。」

「え、まじで？」
思わず出てしまつた素直な感想。こんな事見せられるのも迷惑だつたが、いずれこれを僕が他人に見せなけれ
ばならないのかい。ましてや自分の子供になんか見せられる物じゃない。この親父は、この変態親父は、とん

でもない事に子供の僕に見せやがつた。成人しているとはいえ、子の虐待だぞ。

「何いつてんの、やだよ。」

と答えると、父は息を整えながら悲しそうな顔をして落ち葉の上に腰をおろした。

「すまん、ちよつと服取つてくれ。あ、いや、タオルが先だ」

ヌルヌルになつた体を拭くとズボンとシャツを着た。シャツのボタンをはめながらニヤリと笑ひ。

「まあ私も、そうだつたな。東大出てこの仕事は有りえんと思つた。」

「僕はもう就職も決まつたし、継ぐわけないでしょ。お弟子にやつてもらうのが人道的。みんな狙つてるん
だよ。」

「就職？ああ、大手のなんて言つたか建築会社な。立派だな。でもつまらんやめておけ。」

「はあ?!」

「くだらないからやめておけと言つたんだ。才能と勞力を搾取されて、飼われて。期待したほどだったこと
は出来ないぞ。大きな建物を建てました。えらいでちよつて、褒めてもらいたいでちゆか、社長さんに。」

なんだか懐かしい。この馬鹿にした態度は子供の頃よく聞いた。父がよかれと思うことを、子が否定的なとき。
えてして、子供の方が大人で、父親が子供っぽい執着を持って、だだをこねているような、權威の逆転構造な
のだ。こんなだつ子にはつきあえない、と、

「あゝ、もう帰つていい？」

「帰る？今日は帰れないんだな、行程的に。まだ途中なんだわ。」

「いいよ、僕には関係ないし。」

「それは何だ。その手の甲だ。」

「げ、！」

根が生えていた。

「やばいやばい、すぐとつてこれ！明日から学校。」

「とれないだろうな、一晚じゃあ。」

「切る。」

「死ぬ。」

「死ぬ？」

「甘く見るな。細菌工学の粋をこらした工程だ。私達の命はその根で支えられているんだ。切ったら死ぬぞ。」

「おしえな。とうさん、すぐおしえな。どういう事かすぐおしえな」

父に駆け寄ろうとして腕の根がびんと張り、反動で後ろへ転げ込む。

「こらこら慌てるな。落ち着け。いまおしえるから。なんだかおまえ、母さんの口調に似てきたな。」

教えを請うたような、ないような怪しさだが、一子相伝の体裁は整えられ、その場の数時間でその仕組みと技術を手取り早く伝えられ、この身を供した特殊技術の中核は覚悟として身につけた。覚悟を身につけたと同時に、山に受け入れられ、その証拠として深夜から明け方に掛けて感動的な体験をし、それがキノコの毒の作用であろうとも受け入れ、楽しんだ。

そして翌日早朝父と山を下りたときにはこの山を守る使命感が、あたたかい家族愛と共に心の中に現れるのであった。

「ウチもそう。ご明察。嫌だった〜！」

海産物業者はゲラゲラ笑いながら、

「ウチのは一子相伝ってより門外不出の恥だな。」

2

「従業員は8人いるけど飼育は二人でやってるよ。」

家の正面は太平洋。潜っては海の幸を突いてくる。お客様に出すものを用心深く選び出し、一頃は將軍様の直轄地として極上の海の幸を山のように揃えたものさ。市場なんてモノはないよ。口に入るまでが僕らの仕事だと思ってるから、料理も他には任さない。だから海に入るほかに好きなのは料理の道具集めだわ。

最近隣村に出来た産廃業者がいろんな料理道具を集めてくれるから助かる。人間を手術するときの道具の中古だけれども。きれいに消毒すれば大丈夫。でも注射器やメスの刃なんかは渡せないって言うよ。法律で決まってるそう。だから安全だね。

上流に鉱山の多く集まるその地域は、そもそも漁業には向かない土地であった。しかし、その環境でも大いに繁殖をするモノがありその産地として村は発展してきた。

ナミカワゴンベイツブガイという、大型の巻き貝である。大きさはホラ貝ほどもあり、身は非常に美味で、ゆで加減を調節することで寒天のような柔らかくもろい状態からアワビのように歯応えのある状態まで調節

でき、ほのかに松の香りあり、甘く、魚介類のうまみを凝縮した高級食材として古くから珍重されてきた。しかし、繁殖期の雄の精巣には猛毒のバリトキシンが多く含まれ、調理には熟練を要す。クロツブ貝アカツブ貝に並びシロツブ貝とも呼ばれ、江戸の中期、他藩の藩主の悪食の一つとして毒貝を食う話が武勇の一つとして伝わっているが、当地の領主は当然の食材として、食べ続けていた。その地は金の鉱山が多く、藩の財政は裕福で、そのシロツブ貝の養殖改良事業を、大金を投じて推奨した。大金につられて集まる知識人の知恵を借り、様々な学問をふんだんに導入。生物物理学に留まらず、医学に錬金術まで、少しでも役に立ちそうなことは受け入れて、やってみた。しかし、金鉱山が掘り尽くされるとそれまでの浪費体制が維持できず、かといって改革の手も打たず、明治を待たずに破産。領地召し上げ、隣の藩の分領として再編された。養殖事業は受け継がれず、忘れられて行く。毒貝として知られるナミカワゴンベイツブガイを大金を投じ養殖しているという話を聞いて調査に来た新赴任の役人達はその大きさと毒々しさに腰を抜かし、その様があまりにも滑稽だと言うことでその地域のニュースになった。瓦版には身の丈もある毒貝と添い寝するように気絶した侍が表されている。

昭和になって、皇室の海洋生物ブームが影響してか、観光資源の開拓として県の調査が入った。その時の資料に5匹のナミカワゴンベイツブガイが飼育されていると言う記録がある。

美しい入り江の中に庭園のように整えられたツブ貝の生け簀。銘石巨石を配した岸边のむこう、天辺に松の生えた奇岩に囲まれた広く深い海水池は波穏やかで碧く透明度に富んで清廉な厳かささえ備えている。

巨大な日本庭園のような生け簀の中、巨費を四投じて品種改良されたナミカワゴンベイツブガイの巨体が悠々と移動していた。

殻の高さが1500ミリ、体重70000グラムと言う異常な巨大化を経たその生き物は殻がガラスのよう

に透明で、内蔵が透けて見えている。非常にカラフルな臓器を幾何学的に配しているため、一見するととても鮮やかな貝殻のように見えるのだが、貝殻には色はない。

地がオレンジで、白く縁取られた紫色の編み目が広がり、深紅と黒のバラ状組織が等間隔に螺旋を上がつて行く。近くで見るとその大きな模様の中に幾重にも複雑な幾何学模様が配されて、静かに脈動している。内蔵の色は個体差がありどれも非常に鮮やかで美しい。金魚のように体表を色で覆い隠すのではなく、体表が透明という自由を得ることで、複雑で変化に富んだ内蔵部分の色彩を活用でき、これだけの美を獲得することに成功した。人間の体も透明で幾何学的な容器を外殻と出来たなら、とても美しい色彩構成を獲得できるかもしれない。

地が黒で金の網状組織が広がるなど、蒔絵漆工芸のようなモノまでいる。つぶさに見ると、金で縁取られた青や緑の小胞が連なっていて、目を凝らせば凝らすほど奇抜にして目の覚める色彩構成となっている。基本色相は明らかに日本人好みであるところから、作出したのは我が国の職人であることが伺えるが、いったいどうやって成し遂げたのか、興味の尽きないところだが、その技術を現代に復興しようとするなら、案外その道は整えられてもいる。全ての研究成果が書庫蔵10数棟分の膨大な文献として保存されている。財政の許す限り記録し続け編纂され続け、それを元に研究を進め、技術を錬磨発展させてきたのだ。現在でもこれは公開されていて、生物学や歴史学の研究者が訪れては埃一つない書庫の中で研究のヒントを提供されている。

以前は食用として提供されていた。その巨体の肉の量は、ゆうに藩士全員の腹を満たすにあまりあり、その色彩の見事さと言ったら、皿の上に花魁が踊るようであったという。また、死んで肉を抜き取られ、殻となった後には、命とともにその宿命も抜き取られ、透明な殻しか残さないのも、潔い武士道に通じて尊ばれた。

なんて、誰かの本に書かれてしまって、やりにくくなりました。
でもあれは嘘ばかりだよ。書庫蔵通いしても多分見つからないと思うよ。肝心なところは口伝なのさ。今僕が育ててるのは十頭だけど、その分人が十人減ったと言えはわかるかな。
ニヤリと笑って後ろの観光バスを顎で指した。